

## ゆとり世代とは

20代の若者は、とかく「これだからゆとり世代は…」と言われ、世間から冷やかしの対象とされたり、ダメな世代かのように言われているが、彼らが育った「ゆとり教育」とは何なのか、はたしてゆとり教育は失敗だったのか。新任教師の世代でもあるだけに、その登場からの変遷を振り返ってみたいと思います。

### 1 ゆとり教育が生まれた背景

1970年代は、学歴偏重社会で、いい大学に入るためという価値観による詰め込み教育や、過度の受験競争により、授業についていけない子供や、子どもの多様な個性への配慮に乏しい教育となっていた。

その結果、「落ちこぼれ」、「登校拒否（不登校）」、「いじめ」、「校内暴力」、「非行」、「体罰」、「学級崩壊」、「暴走族」などの問題が多発するようになった。その時代を反映する番組として、金八先生（1980年）、スクールウォーズ（1984年）、尾崎豊「卒業」（1985年）などで、子ども達の叫びが取り上げられている。

これらの問題の多発から、行き過ぎた詰め込み教育で失われた「心優しい子」を育てるため、ゆとりのある教育の重要性が唱えられました。また経済界からも、企業が採用したい人材として、頭が良くても使いものにならない人材よりは、「生きる力」のある人材を求めるといった社会的なニーズがあった。

📍 この時代は、教師が教室にたどり着くまでに、廊下に座り込んでいる生徒たちを教室に入れながら歩くのが日常でした。生徒に注意する先生と、黙認する先生が混在していました。問題行動が起こるたびに、職員会議が深夜にまで及び、「長い目で見ましょう。」と敗北を認めたくない教師と、「警察力を入れた方がいい。」という教師の議論が、空回りしていました。生徒に胸ぐらをつかまれ、辞めていった新任教師もいたのです。（私の故郷、岩手から来た教師でした）

子ども達は、「学校がつまらない。」と言い、教師は敗北感で疲弊していました。唯一の救いは、教師の気持ちを分かってくれる子ども達の存在でした。彼らと目が合うたび、この子達のためにも、折れてはいけないと思うのでした。

### 2 ゆとり教育の導入

それまでの詰め込み教育の反省から、「ゆとり」という言葉が生まれました。平成8年(1996年)の中央教育審議会一次答申の「はじめに」では、次の様に記述されています。

我々は、学校・家庭・地域社会を通じて、我々大人一人一人が子供たちをいかに健やかに育てていくかという視点に立つと同時に、子供の視点に立って審議を行い、今後における教育の在り方として、「ゆとり」の中で、子供たちに「生きる力」をはぐくんでいくことが基本であると考えた。

この中で、「ゆとりの確保」の具体例としては、(1)「学校週5日制」の完全実施により、子ども達に自由な時間を与えることや、(2)学習内容を厳選することで、余った時間を教師の裁量に委ねることでした。

この理念のもと、平成14年度(2002年度)から平成22年度(2010年度)まで実施された学習指導要領には、次のような特徴がありました。

- (1) 学校週5日制完全実施(それまでは、土曜日は午前中授業でした。)
- (2) 新学力観の導入(基礎基本、個性重視、生きる力)
- (3) 授業時数の削減(年間授業時数は、週当たり2時間削減)
- (4) 教育内容の厳選(スリム化)
  - ・ 高度になりがちな内容を削減したり、上の学年に移行統合。  
(理・数などは、おおむね8割程度の時数で指導できる内容に削減。)
- (5) 総合的な学習の時間の新設  
(各学校が教科にとらわれずに、創意工夫を生かした特色ある教育活動。)
- (6) 小学校1・2年で理科・社会を統合し、生活科を新設。
- (7) 中学校では、英語が必修となり、クラブ活動が廃止となった。
- (8) 盲・聾・養護学校においては、「養護・訓練」を「自立活動」に改める。
- (9) 絶対評価の導入(相対評価の廃止)
- (10) 偏差値による進路指導を廃止

これら「ゆとりのある教育」の実践によって、学校では時間的なゆとりが生まれ、学活やレクなど、生徒が楽しめる時間が増え、学級に屈託のない笑いが戻ってきました。成績の順位を貼り出すことも止め、競争意識は緩和され、「みんな違ってみんないい」という個性を認める教育が浸透していきました。また校内暴力等の諸問題も無くなりました。

### 3 ゆとり世代とは

ゆとり世代とは、平成14年度(2002年度)から平成22年度(2010年度)まで実施されていた学習指導要領による「ゆとりのある教育」の元で育った世代のことで、

実施初年度の小1は現在23歳で、9年間のゆとり教育をフルに受けてきたことになります。

また、初年度の中3は、1年間のゆとり教育を受けて、現在31歳になっています。同様に、ゆとり教育最終年度に小1だった児童は、ゆとり教育を1年間受けた後、小2からは、平成23年度(2011年度)からの新学習指導要領下の教育を受け、現在15歳になっています。

現在の年齢と、ゆとり教育を受けた年数の関係は、表にすると、次のようになります。

年齢	<b>15</b>	16	17	18	19	20	21	22	<b>23</b>	24	25	26	27	28	29	30	<b>31</b>
年数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①

したがって、どこまでをゆとり世代とするかは、解釈が分かれるところです。

\* ここでは、わかりやすくするために、あえて「ゆとり教育」や「ゆとり世代」という表現を使っていますが、この表現は、マスコミや、教育評論家なる人たちが作り出した言葉で、文科省は使っていません。

この世代の若者の特徴としてよく言われるのが、心が豊かで余裕がある／仕事以外に価値観を見いだせる／安定で堅実な生活を心がける／ナンバーワンよりオンリーワン志向／個人主義的な側面／ITに強い／ネットでの在宅勤務を望む／スピード重視／個性的な性格／などが挙げられています。

一方、指示待ち人間／叱られるのに弱い（ストレス耐性が低い）／競争意識が低い／付き合いが悪い（飲み会よりもプライベート優先）／守りに入る（ギャンブルにも手を出さない）／直接のコミュニケーションが苦手（メールやラインで欠勤連絡をする）／執着心が薄い／などが挙げられ、これらネガティブなイメージが、「とにかくゆとり世代は…」と言われているゆえんです。

#### 4 脱ゆとり教育へ

ゆとりのある教育が始まって間もなく、平成16年(2004年)、OECDの学習到達度調査(PISA)、国際数学・理科教育調査(TIMSS)の結果が公表され、日本の点数低下が問題となりました。

学力低下に対する親の不安から、学習塾への通塾者が増え、公立学校不信を背景に、土曜授業を行う私立中高一貫校に流れる傾向が出たり、東京都の公立学校では、土曜授業の復活等の兆しも現れ、マスコミからは、「ゆとり教育が学力低下を招いた」と批判されました。

PISAとは、OECD加盟国が共同開発した学習到達度調査である。義務教育を終えた高1の生徒を調査対象とし、3年のサイクルで実施されている。内容は、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について調査され、生徒の知識や技能が、実生活で直面する課題にどの程度活用できるかをはかるものです。

PISAの日本の順位を見てみると、2000年の第1回では、世界でも上位（読解力8位、数学1位、科学2位）であったが、2003年の第2回では、順位が中位（読解力14位、数学6位、科学1位）に落ちたことが指摘されました。

また、小中学生が参加したTIMSS2007では、算数、理科に対する興味・関心は、国際平均よりも低く、中学生になるにつれ低下しているという結果が出ています。

これ以後、ゆとり教育の見直しへと動き始めます。

平成19年(2007年) … 安倍晋三首相のもと「教育再生」と称してゆとり教育の見直しに着手

平成21年(2009年) … 総合的な学習の時間・選択教科を削減し、授業時数を増加  
(週28時間から29時間へ)

平成23年(2011年) … 改定学習指導要領で学習内容を増加(小6は週1時間増)、  
事実上のゆとり教育の終焉、脱ゆとり教育と称されました。

脱ゆとり教育として、平成23年度(2011年度)から平成31年度(2019年度)まで実施された学習指導要領には、次のような特徴があります。

- (1) 「ゆとり」でも「詰め込み」でもなく、「生きる力」を育む理念の元、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成を重視する。
- (2) 授業時数の増加
  - ・ 小学校は、各学年で算数が週1時間増、5・6年生で外国語活動を導入し、週1時間増。
  - ・ 中学校は、数・理・保体・外国語を微増し、合計で週1時間増。
  - ・ 小・中共に総合的な学習の時間を削減、中学校の選択教科の廃止。
- (3) 学習内容の増加
  - ・ 言語活動と理数教育の充実、外国語教育の充実、伝統や文化に関する教育の充実、体験活動を充実(集団宿泊活動・職場体験活動の推進等)。
  - ・ 道徳教育を充実、健やかな体を育てる、社会の進展に対応した教育を行う。
- (4) 小学校教科書のページ数が25%増加。
- (5) 教科書が厚くなったことにより、ランドセルも大型化した。
- (6) 学校教育の情報化(情報教育、ICT活用、校務の情報化)。

脱ゆとり教育のその後の児童の変化としては、「分かりやすく伝えたり、説明できる、感じたことを表現できる」等の増加は見られたものの、小学校では、国語と算数に授業進度の遅れ、疲れている児童や授業について行けない児童が増加し、児童間の学力格差の広がりがみられる。

教師にとっては、教材研究・準備の時間不足、児童の学習意欲を保つことへの困難性等が指摘されています。

## 5 ゆとり教育は失敗だったのか

「詰め込みよりもゆとりを」で始まったはずが、いつの間にか学力低下問題にすり替わり、「ゆとり教育は失敗であった」という風潮により、終焉を迎えてしまいました。

しかし学力は本当に低下していたのでしょうか。では、その発端となったPISAのその後を比較してみましょう。以下に2000年の第1回調査から2018年の第7回調査までの日本の順位と、ゆとり教育との関係の一覧を示してみましょう。

回	調査実施年	読解力	数学的リテラシー	科学的リテラシー	参加国	詰め込み教育期間	ゆとり教育期間	脱ゆとり教育期間
1	2000年	8位	1位	2位	32	9年間		

#### 2002年、ゆとり教育開始

2	<u>2003年</u>	14	6	1	41	8年間	1年間	
3	<u>2006年</u>	15	10	5	56	5年間	4年間	
4	2009年	8	9	5	65	2年間	7年間	

#### 2011年、脱ゆとり教育開始

5	<u>2012年</u>	4	7	4	65		8年間	1年間
6	2015年	8	5	2	72		5年間	4年間
7	<u>2018年</u>	15	6	5	79		2年間	7年間

これを見ると、学力低下の発端となった2003年の第2回調査に参加した高校1年生は、ゆとり教育を1年間しか受けていないことになります。

最も順位が後退した2006年の第3回調査の参加者は、2002年のゆとり教育移行時、小学校5年生でしたので、詰め込み教育を5年間、以後のゆとり教育を4年間受けていたことになります。

同様に、順位が向上した2012年の第5回の場合は、ゆとり教育を8年間受けていた生徒だったことになります。

更に言えば、2018年の第7回調査では、脱ゆとり教育を7年間受けてきた生徒で、順位が下がっている傾向にあります。

したがって、これを見る限りでは、ゆとり教育で学力が低下したという根拠にはならないのです。ゆとり教育は失敗とは言えないのです。

では、「生きる力」の3つの要素である知「自己教育力」、徳「豊かな人間性」、体「健康や体力」がバランス良く育っているのかという点については、検証する具体的な資料が無く比較できないのですが、ゆとり世代の若者たちが今後どのような活躍を見せてくれるのかで知ることができるのではないのでしょうか。また、実際に教育現場にいた教師たちがどう感じているのかにもよると思います。

- 私にとって、ゆとり教育の時代は、生徒と共に、やりたいことをやれたなという思いがあります。例えば文化祭、学級の展示物作りに十分な時間をかけて思い切り取り組むことができました。それは総合の時間があったからです。合唱コンクールの練習過程でも、学級が何度も壊れて、立ち直って、また壊れても、最後には見事に「大地讃頌」を歌いきって、震えるような感動を覚えたことを思い出します。

「共に歩む喜び」がそこにはありました。

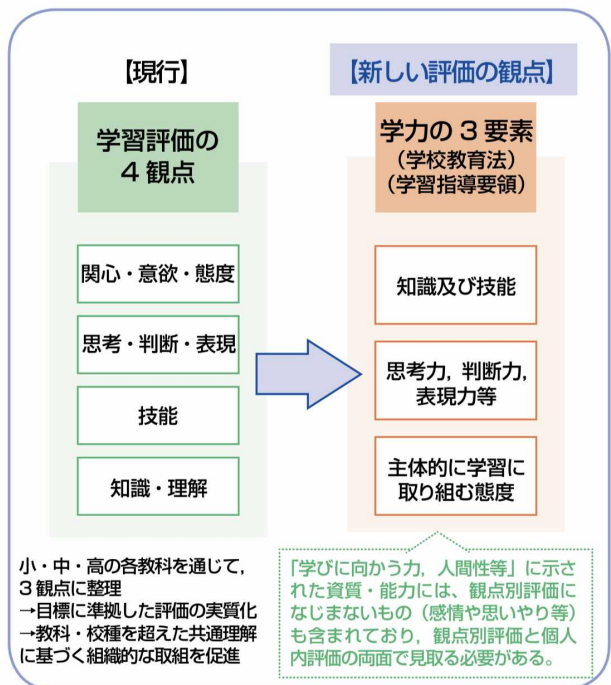
ゆとり世代の君たちに言いたいのは、君たちは失敗作ではない、教師の誰もが一生懸命、情熱を持って君たちを育ててきたのだから、失敗のはずがないのです。



## 6 今後の方向性

脱ゆとり教育の次の改定となる、令和2年度(2020年度)から始まる学習指導要領には、次のような特徴があります。

- (1) 「生きる力」を育む理念は、従来と同様。  
キーワードとしては、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」
- (2) 道徳の教科化 (小学校は2018年、中学校は2019年)
- (3) 英語教育の充実
  - ・小学校5・6年生の「英語の教科化」、週2時間。
  - ・小学校3・4年生の「外国語活動」を週1時間。
  - ・中・高の英語の「授業は英語で行うこと」が基本となる。
- (4) 評価の観点を変更
  - ・4観点から3観点へ(右図)。
- (5) 情報活用能力の育成
  - ・小5から「プログラミング教育」を導入。
  - ・ICT教育の環境整備のために、学習用コンピュータを3クラスに1クラス分程度整備し、無線LANを通常教室に100%整備するとして、国が財源を保障。
- (6) 不登校・いじめ等の支援・対応のために、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの配置拡大を目標にしている。



## 7 まとめ

ゆとり教育は、詰め込み教育の反省から、必然的に生まれました。ゆとり教育という改革により、多くの諸問題が改善され、効果が現れました。そのような中に育った子ども達は、「ゆとり世代」とはいわれるものの、決して世間から揶揄されるような存在ではないのである。

しかし、再び脱ゆとり教育として授業時数増に戻ってしまいました。子ども達の心が心配です。今学校には、いじめを始め、教師の疲弊など、諸問題が再び出始めています。はたして歴史は繰り返すのか…。

👤 再びゆとりのない時代に戻ってしまいましたが、でも教師は賢いですから、時間は無くてもやりくりして、工夫して、いくらでも乗り切っているのです。タフですから…。

ただ、「これだからゆとり世代は…」という表現は、差別用語として認知してほしいなと思っているのです。でないと彼らがかわいそうだ。